博士論文要旨及び学位論文審査結果要旨

保健医療学研究科保健医療学専攻 学位授与年月 日 令和3年3月12日 博士後期課程 作業療法学分野 博士論文受理年月日 令和2年12月10日 学籍番号:2186002 名:伊藤 香織 論文審查終了年月日 令和3年2月16日 博士論文名 Effects of visual impairment after acute stroke on activities of daily living 論 Objective: In stroke patients with visual impairment, it is unclear which activities of daily living (ADL) are affected or how they are affected. This study aimed to determine the effect of the type and frequency of visual impairments on ADL in acute stroke patients. Methods: We interviewed stroke patients without severe movement disorder, aphasia, general

inattention, or hemispatial neglect who were admitted to our hospital between September 2018 and May 2020 for lesions in the cortical and subcortical white matter posterior to the central sulcus. The patients were asked via a questionnaire whether they had ADL impairments related to 13 types of visual impairments, and to provide specific examples. We determined the types of visual impairments, the frequency of each impairment, and what effect they exerted on daily life.

Results: Seventeen participants were included. Sixteen participants had defective visual search, 15 had hemianopic dyslexia, 10 had walking trajectory deviations, and 7 had difficulty in recalling the place where they were seeing right before. In addition, there were defective visual counting, difficulty in judging distance, and pure alexia.

Conclusion: Even in cases without severe movement disorder, aphasia, general inattention, and hemispatial neglect, cerebral infarction in the posterior half of the cerebrum causes problems in ADL due to visual impairment. It is important to interview patients from the acute stage with visual impairment in mind.

要

文

旨

主查:作業療法学分野教授 藤井浩美

副查:作業療法学分野教授 佐竹真次、副查:看護学分野教授 後藤順子

新規性·有効性

急性期脳血管疾患患者の約 46%に視覚障害が生じるものの、急性期病院では、運動障害 に関する日常生活動作(ADL)の改善が主眼となるため、見過ごされやすい。そのため、 視覚障害が退院後の生活の妨げになる可能性に着眼した研究ある。重度の運動障害、失語、 全般性注意障害、半側空間無視がない急性期脳梗塞患者にみられる視覚障害の種類と頻度、 生活に与える影響を調査する目的で行った臨床研究である。

論

文

審

学

26 か月間に急性期病院に入院した脳梗塞患者のうち、中心溝より後方の皮質・皮質下に新鮮梗塞があり、Barthel Index(BI)75 以上、WAB 失語症検査の聴理解 8/10 点以上、数の順唱 5 以上、Catherine Bergego Scale2 以下の患者を対象とした。そして、脳卒中後に生じたという報告のある 13 種類の症状によって起こると考えられる入院生活上の問題の有無と具体例とを質問した結果、 17 名の患者がその基準を満たし、視覚探索障害が 16 名、半盲性難読が 15 名、歩行時に病巣と反対側に寄って行ってしまう症状が 10 名(内、症状の無自覚 7 名)、直前にどこを見ていたか分からなくなる症状が 7 名であった。歩行時に病巣と反対側に寄っていく症状は、他の諸症状と異なり無自覚の患者が多く、BI 関連の ADL 場面では、移動(階段)、整容、食事で、視覚障害による困難さが生じていたことが分かった。

查

結

この研究の新規性と有効性は、中心溝より後方の皮質・皮質下の脳梗塞患者のうち上記の条件を満たす場合でも、種々の視覚障害による生活上の問題が生じることが示された点である。また、自覚なしに病巣と反対側に寄る症状と視覚探索障害の組み合わせなど、危険につながりうる障害があることは、急性期から種々の視覚障害を念頭に置いた聞き取りを行い、症状を発見、必要なリハビリテーションを行うことで、患者の ADL や生活の質を高めるために重要な視点である。これらは、根拠に基づく作業療法実践(Evidence-based occupational therapy practice)に有用であり、博士論文に値する。

果|信頼性

結果を得るための指標は、その信頼性、妥当性が十分に検証されていた。

総評

要

筆頭著者として,

この博士論文は、筆頭著者として、作業療法のオフシャル雑誌である Asian Occupational Therapy に投稿中であり、掲載されることを期待する。

旨